

# Geo-Communication

## ジオ・コミュニケーション NL No.4

### ジオ・コミュニケーション ニュースレター (=NL) No.4

コロモカール金曜市とジャムルキ土曜市  
—グラムバングラ便り—

ジオ・コミュニケーションとは、ある事象に関して、「場所」についての何らかの合意があるようなコミュニケーションを意味します。

ジオの語源は、英語の geography のギリシャ語 γεωγραφία (=geographia) の接頭語である γεω (=geo) にあり、地球、土地、土壌などを意味します。

コミュニケーションは、ラテン語の communicare を語源としますが、一つにする、まとめる、つきあう、交際する、行き来するなどの意味が含まれます。

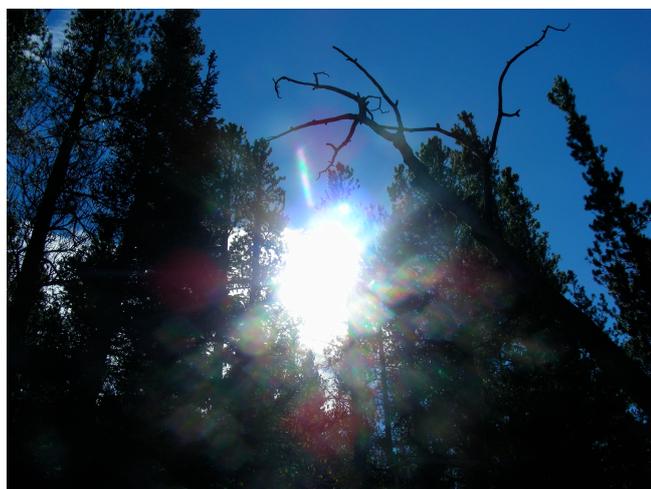
「一緒に」を意味するのが communis であり、フランス語の commune (共同体)、英語の community の語源となっています。

デジタル雑誌である「ジオ・コミュニケーション」では、主に話題提供を行う「ニュースレター」 (=NL) と個別の論文である「ワーキング・ペーパー」 (=WP) の二種類を公刊していく予定です。

なお、発行元は、香川大学を本拠としている「地球ディベロプメントサイエンス国際コンソーシアム」 (=ICEDS) が運営している環境史研究プロジェクトです。

香川大学アーツ・サイエンス研究院教授

村山 聡



Rocky Mountains, Colorado, USA,  
October 4, 2007

連絡先：香川大学 ICEDS代表 村山 聡  
住所：香川県高松市幸町 1-1 香川大学  
電話/Fax: 087-832-1571  
Email: [muras@ed.kagawa-u.ac.jp](mailto:muras@ed.kagawa-u.ac.jp)  
URL: <http://rfweb.ed.kagawa-u.ac.jp/project/wiki/muras/wiki.cgi>

## コロモカール金曜日とジャムルキ土曜日—グラムバングラ便り—

名古屋大学環境学研究科教授 溝口 常俊

2012年3月8日中部国際空港（セントレア）から午前10時半発のシンガポール航空でシンガポール空港に向かう。同行者は神谷哲史君（昨年UCSB修士修了、この4月から武田薬品入社）1人、シンガポール、チャンギ空港で土屋純氏と村山聡氏と合流、午後7時半のダッカ行きに搭乗。ダッカ空港に午後10時半着。ここで渡辺和之氏と合流。カーンさんとお孫さんのシャミールがお出迎え。2台の車に便乗しエレファントロードのカーンさん宅に0時過ぎに着。真夜中なのに車の渋滞がひどく、通常（すいているとき）の倍の時間がかかった。すいている時間帯は午前0時から早朝6時までだから、渋滞しているのが通常というべきかもしれない。あげ素麺とチャイをいただいて午前1時過ぎに就寝。

3月9日、爆睡中の午前5時半、爆音のアザーン（大音量で流されるアッラーの神にささげるお祈り）に起こされる。

9時に朝食（写真1）、チャイ、そして調査打ち合わせ。最大の障害は3月11日と13日に政党集会（現政府のアワミ連盟VS野党NBA）がダッカであり、全国から何百万人とひとがダッカに押し寄せてくるとのこと。そのため交通渋滞がひどくなり、移動はほとんど困難になるらしい。10日の夜にダッカ着の高井氏と早稲田大学の2人の女子学生さんたちはカーンさんの家に缶詰になり、村には来ら

れないであろう。2泊の強行軍でのバングラ旅行でバングラ農村をみせてあげられないのが残念。



写真1  
カーンさん宅での朝食

10時にエレファントロードのカーンさん宅を出てダッカ市外の渋滞を抜け午後1時にカンチャンプールのグラムバングラ（カーンさんが主催するNGOで宿泊施設や研修施設も備えられている）に着く。アロンギ（グラムバングラの管理者）、チョンパ（我々のバングラの母：料理人）、ショロン（チョンパの次男）が歓迎して下さる。ショジップ（チョンパの長男20歳）は昨日カーンさんの家に泊まりわれわれと同行して道案内。チョンパの昼食後、ひと休みして、3時にコロモカール金曜日に出かけた。村道を歩くこと40分、この数年間グラムバングラに来るたびに散歩する馴染みの道だ。見慣れている道なのに新たな風景との出会いもあった。以下、「コロモカール金曜日への道」と題して風景写真を載せておこう（写真2～10）。

写真2はグラムバングラの北にある小学校の運動場だが、その北のはずれに茶店ができていた。

茶店の手前にレンガ瓦礫がやまずみされているが、これはグラムバングラの養魚池の南にある橋から、グラムバングラと小学校の前を通り、ボンシー川にかかるカーンさん橋までの村道を舗装するための下地用のレンガ瓦礫である。



写真2  
小学校運動場に新たに出来た茶店



写真3  
乾季の水田に地下水供給

道路工事人夫も多数動員されたため、茶店の需要も生じたのであろう。運動場では相変わらずクリケットが行われていた。茶店を過ぎて右手の水田を見ると地下水くみ上げの発動機のスイッチが入れられたところだった（写真3）。乾季の稲IRRI（イリ米）の田には水が必要で、あちこちでどんどん汲み上げられている。グリーンレボリューションは確かに革命かもしれない。乾季にイリ米が導入さ

れたことにより、雨期の浮稲アモン→からしな（菜の花）/野菜畑→イリ、という2期作+畑作が可能になり食料倍増となったからである。

道路工事中で道底が掘られた狭い道に何台か車が連なって走ってきた（写真4）。結婚式が花嫁の村で繰り広げられるのである。乾季は結婚式のシーズンでもある。橋ができて道が良くなると車がどんどん入ってくる。10年前には見られなかった光景だ。



写真4  
花嫁の車が通過

カーンさん橋（カーンさんが村人に提供）に上って見ると、ボンシー川が干上がっていた。プラマプトラ大河川の支流で、大きな川の方だが、もう少しで川底を歩いて渡れるくらい干上がっていた（写真5）。雨季になると濁流が押し寄せ左手奥の河岸がかなりの勢いで削られていく。



写真5  
干上がったボンシー川

その川の橋を渡って数分歩くとユニオンオフィスの近くのバザールに出る。そこに店を構えるハル君（アロンギの弟。日本に出稼ぎの経験あり）のお菓子屋は健在であった（写真6）。申し訳ないと思いつつ7upを安く御馳走になってしまった。



写真6  
ハル君のお菓子屋

しばらく歩いて行きシャハバリ（商人カーストの屋敷地）に差し掛かるとカーリー女神像とドゥルガ大母神像の祠小屋があった。ベンガルのヒンドゥー教徒はカーリーが大好きである。カーリーに祈りを捧げよう、ということで記念撮影（写真7）。



写真7  
カーリー(左)とドゥルガ神像(右)の前で

また歩き、火炎樹の赤い花を見て、鍛冶屋のバリを眺め、石橋を越えて、左に大きく折れて、コロモカール(鍛冶屋)金曜日市に到着（写真8）。バングラデシュの中

ではこじんまりした市（売り手百数十人）で、ここ数年賑やかさは変わっていない。交通不便な位置にあるので村人にとっては欠かせない市だ。帰路バイク5人乗り家族に出会った（写真9、10）。



写真8  
コロモカール金曜日市全景



写真9  
バイク5人乗り（前から撮影）



写真10  
バイク5人乗り（後ろから撮影）

後ろの女性2人は大丈夫だが、前の子2人が心配だ。道は砂埃で、穴があったり欠けていたりするので、かなりスリリングである。後部座席にお母さんが横向きに座り赤ちゃんを抱いている姿をよく目にする。これはみている方が怖

い。早く舗装道が完備されることを望むが、そうなったらそうなたでスピードが出てもっと危険になってしまう。

6時前、グラムバンガラに帰宅直後に雨が降り出した。今は乾季なのに、なんと4か月ぶりの雨だという。2時間後、雨は止み、満天の星とホテルの舞い。雨と星とホテルもわれわれを歓迎してくれた。蚊はほとんどいず、苦勞して運び込んだワンタッチ蚊帳もいらなくらいだった。それに珍しく停電がなく、快適な一夜であった。ここはバンガラの軽井沢、と冗談で言ってみたが、まんざらでもなかった。村山さんは今晚が最初で最後。もったいない。

3月10日(土)は、ミルジャブール郡最大規模の定期市であるジャムルキ土曜市に出かけることにした。まずは10時に現地調査員シャキールがグラムバンガラの南2軒隣の自宅から登場。車が30分遅れてグラムバンガラの養魚池近くの橋まで到着。昨夜の大雨により村道はぬかるみグラムバンガラまでは入ってこれなかったからである。それにしても昨日の大雨は乾ききっていた大地にとっては恵みの雨だったが、道路はところどころで泥沼と化し通行の障害となった。でも、真夏のバンガラで、夜10時から早朝5時半のアザーンで起こされるまでぐっすり寝られたのは、雨後の一風の涼しさのおかげであった。

村山さんは村で1泊しただけで早くも本日帰国。国道沿いのジャムルキまで乗り合わせ、その

ままダッカへ向かった。氏の名譽のために氏の民俗調査報告をここで記しておこう。国道からグラムバンガラまでの30分間の車窓から道路ですれ違った男性すべてのパンツ調査を行ったのでした。バンガラの男性はルンギという腰巻をズボンがわりにまとっている。首都ダッカではズボン姿の男性が多かったから、村ではどうか比較してみようということだ。その結果60人中8割の48人がルンギ姿であった。ルンギ姿の男性を見つけると歓声が上がるという愉快な調査であった。

さて、国道沿いのジャムルキに私の長年来のアシスタントのルトファーが来てくれ、まずは茶店で一服。全員で市(いち)内巡りをして1時に別の茶店に入りラウ(トウガン)カレーとダルスूपとローティの昼食、食後に甘いジェラピー(揚げ菓子)とチャイ。

ジャムルキ市は午後3時ころがピークということで、その時間帯に合わせて、土屋氏はドカン(常設店舗)を確認し、渡辺氏と私は2手に分かれて露天商の配置図を作成し、ルトファーとシャキールはそれぞれ十数人づつインテンシブな聞き取り調査をおこなった。バンガラ初めての神谷氏はシャキールに同行する。それぞれの調査を終えて午後4時に国道沿いの茶店に集合しミーティング。

26年前の1986年1月8日に調査した時は露天商1861人を数えたが、今回は、相変わらず大混雑していたとはいえ、みたところ1000

人程度に半減していた。集団になっているのは変わらないがニワトリ売りが235人から14人に、アヒル売りが40人から1人に、鳩売りが40人から30人に、竹製品売りが63人から24人に、床屋が33人から8人になったし、正確な数は出せていないが、ジャガイモ売り、米売り、ルンギ商、衣類商、そして本売りも激減していることは間違いない。他の定期市調査結果が出れば実証されるが、常設店舗の増加と朝市の併設が大きな原因であろう。

以前魚売りがいた場所を家具作りが引き取った屋根付き作業場があった。聞くところによると少量を自分でとって自分で売る貧しいラズボンシー(漁民カースト)の数が減ったからであるという。川や池で漁獲するのが困難になり養殖池の時代になったといえよう。大型のパンガシュという養殖魚が飛ぶように売れている。となると漁師も資本力を持ったのが生き残ることになる。漁には全くタッチせず、仕入れて売るといった商人が登場する。魚売りはヒンドゥー教徒と思いきや、イスラム教徒の魚売りが現れたのである。

編集後記(村山)

MARCH 30, 2012

このニュースレターは、名古屋大学環境学研究科教授の溝口常俊氏が長年継続的にメイリングリストで関係者に送付されている「高畑ニュース」の中から、1117号を中心に1118号の一部を加えて編集させて頂いたものです。